



第2回

次の文章は、黒井千次(一九九一年発表の一節である)。「私は会社勤めを終え、自宅で過ごすことが多くなっている。隣家(大野家)の庭に息子のためのプレハブ小屋が建ち、そこに立てかけられた看板に描かれた男が、「私の自宅のサイン」キチン(キッチン)から見える。その存在が徐々に気になりはじめた私は、看板のことを妻に相談するなかで、自分が案

答えよ。(配点 50)
立看板をなんとかするよう裏の家の息子に頼んでみたら、という妻の示唆を、私は大真面目で受け止めていたわけではなかった。落着いて考えてみれば、その理由を中学生かその少年にどう説明すればよいのか見当もつかない。相手は看板を案山子持ちが楽になつただけの話だった。いやそれ以上に、男と睨み合った時、なんだ、お前は案山子ではないか、と言つてやる僅かなゆとりが生れるほどの力にはなつた。裏返されればそれまでだぞ、と窓の中から毒突くのは、一方的に見詰められるのみの関係に比べればまだましだったといえる。

しかし実際には、看板を裏返す手立てが極めぬ限り、いくら毒突いても所詮空威張りに過ぎぬのは明らかである。そして裏の男は、私のそんな焦りを見透したかのよう、前にもまして帽子の広いつばの下に眼に暗い光を溜め、こちらを凝視して止まなかつた。流しの窓の前に立たずとも、あの男が見ている、との感じは肌を伝わつた。暑いのを我慢して南側の子供部屋で本を読んだりしていると、すぐ隣の居間に男の視線の気配を覚えた。そうなる、本を伏せてわざわざサインキチンまで出向き、あの男がいつもと同じ場所に立っているのを確かめるまで落着けなかつた。

隣の家に電話をかけ、親に事情を話して看板をどうにかして貰おう、という手も考えた。少年の頭越しのそんな手段はフェアではないだろう、との意識も働いた。その前に親を納得させる自信がない。もしも納得せぬまま、ただこちらのいきこざをおかしな人間が任んでいる、そんな噂を立てられるのは恐ろしかった。

ある夕暮れ、それは妻が家に居る日だったが、日が沈んで外が少し涼しくなつた頃、散歩に行くぞ、と裏の男と眼で告げて玄関を出た。家を離れて少し歩いた時、町会の掲示板のある角を曲つて来る人影が気がついた。迷彩色のシャツをだらしなくジーンズの上に出し、俯きかけた道の端をのろりと近づいて来る。まだ青も切らぬ柔らかな骨格と、無理に背伸びした身なりとアンバランスな組合せがおかしかつた。細い首を支えられた坊主頭がふと上り、またすぐに伏せられた。A隣の少年だ、と思つて同時に、私はほとんど無意識のように道の反対側に移つて彼の前に立っていた。

声を掛けられた少年は怯えた表情で立ち止り、それが誰かわかると小さく頭く仕種で頭だけ下げ、私を避けて通り過ぎようとした。

「庭のプレハブは君の部屋だろ」

何か曖昧な母音を洩らして彼は微かに頷いた。

「あそこに立てかけてあるのは、映画の看板か」

細い眼が閉じられるほど細くなつて、警戒の色が顔に浮かんだ。

「素敵な顔だね、うちの台所の窓の真正面になるんだ。置いてあるだけなら、あのオジサンを横に移すか、裏返しにするか」

そこまで言いかけると、相手は肩を聳やかす身振りで歩き出そうとした。

「待ってくれよ、頼んでいるんだから」

肩越しに振り返る相手の顔は無表情に近かつた。

吐き捨てるように彼の俯いたまま低く叫ぶ声はつきり聞えた。少年の姿が大野家の石の門に吸い込まれるまで、私はそこに立ったまま見送つていた。

ひどく後味の悪い夕刻の出来事を、私は妻に知られたくなかつた。少年から見れば我が身が縁な動機先も持たぬジジイであることに間違ひはなかつたろうが、一応は礼を尽して頼んでいるつもりだったのだから、中学生の縁鬼にそれを無視され、罵られたのは身に応えた。B身体を底を殴られたような厭な痛みを少しでも和らげるために、こちらの申し入れが理不尽なものであり、相手の反応は無理もなかつたのだ、と考へてみようとした。謂れもない内政干渉として彼が憤る気持ちもわからぬではなかつた。しかしそれなら、彼は面を上げて私の申し入れを拒絶すればよかつたのだ。所詮当方は雀の論理しか持ち合わせぬのだから、黙つて引き下ろしなさいわい。その方が私もまだ救われたらう。

無視と恰詞にも似た罵言とは、彼が息子よりも遙かに歳若い少年だけに、やはり耐え難かつた。

夜が更けてクローラーをつけた寝室に妻が引込んでしまつた後も、私は一人居間のソファーに坐り続けた。穏やかな静けが寝室の戸の隙間を洩れて来るのを待つてから、大型の懐中電灯を手にしてサインキチンの窓に近づいた。もしや、という淡い期待を抱いて隣家の庭を覗つた。手前の木々の葉越しにプレハブ小屋の影がぼくと白く深々だけで、庭は闇に包まれている。網戸に擦りつけるようにして懐中電灯の明りをともした。光の環の中に、きつと私を睨み返す男の顔が浮かんだ。闇に縁取られたその顔は肌血の色さえ滲ませ、眉間より一層生々しかつた。

「馬鹿殿」

咳く声か身体にこもつた。暗闇に立つ男を罵っているのか、夕刻の少年に怒りをぶつけているのか、自らを嘲つているのか、自分でわからなかつた。懐中電灯を手にしたまま素早く玄関を出た。土地ざりざりに建てた家の壁と塀の間を身体を斜めにし、すり抜ける。建築法がどうなっているのか識らないが、もう少し肥れば通ることの叶わぬ僅かな隙間だつた。ランニングシャツ一枚の肩や腕にモルタルのざらつきが痛かつた。

東隣との低い生垣に突き当たり、雑葉の間を強引に割つてそこを跨ぎ越し、我が家のブロック塀の端を迂回すると再び大野家の生垣を掻き分け真の庭へと踏み込んだ。乾いた小さな音がして枝が折れたようだつたが、気にかかる余裕はなかつた。

繁みの下の暗がりで一息つき、足許から先に懐中電灯の光をさつと消してすく消した。右手の母屋も正面のプレハブ小屋も、明りは消えて闇に沈んでいる。身を屈めたまま手探りに進み、地面に雑然と置かれていた小さなベンチや傘立てや三輪車をよけて目指す小屋の横に出た。

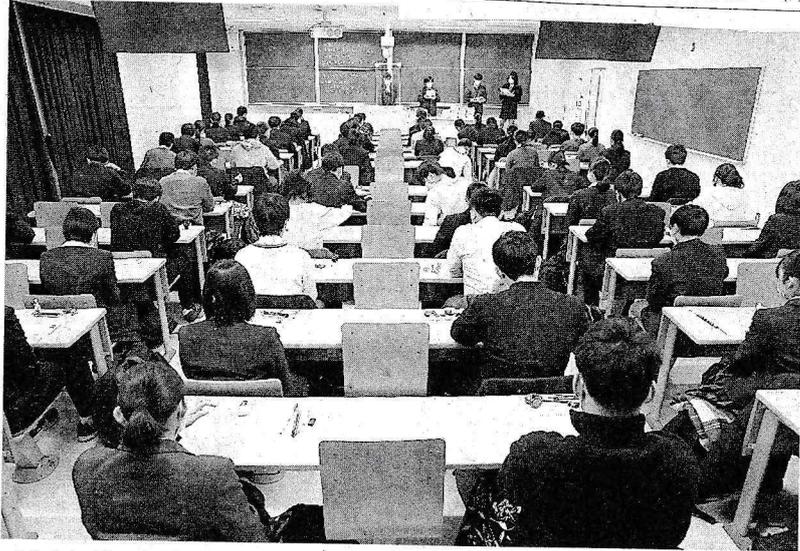
男は見上げる高さでそこに平たく立っていた。光を当てなくとも顔の輪郭は夜空の下にぼんやり認められた。そんなただの板と、窓から見える男が同一人物とは到底信じ難かつた。これではあの縁鬼に私の言うことが通じなかつたとしても無理はない。案山子にとまつかはるはこんな気分がするだろうか、と動悸を抑えつつも苦笑した。

しかし濡れたように滑らかな板の表面に触れた時、指先に厭な違和感が走つた。それがベニヤ板でも紙でもなく、硬質のプラスチックに似た物体だつたからだ。思わず懐中電灯をつけてみずにはいられなかつた。果して断面は分厚い白色で、裏側に光を差し入れたところには金属の補強材が縦横に渡されている。人物の描かれた表面処理がいかなるものかまでは咄嗟に掴めなかつたが、それが単純に紙を貼つただけの代物ではないらしい、との想像はついた。雨に打たれて果無く消えるどころか、これは土に埋められても腐ることのないしたかな男だつたのだ。

それを横にすらすか、道に面した壁に向きを変えて立てかけることは出来ぬものか、と持ち上げようとした。相手は根が生えたかの如く動かない。これだけの厚みと大きさがあれば体重もかなりのものになるのだろうか。力を入れやすい手がかりを探ろうとして看板の縁を辿つた指が何かに当つた。太い針金だつた。看板の左端にあけた穴を通して、針金は小屋の端としっかり結ばれている。同じような右側の針金の先は、壁に突き出したボルトの頭に巻きついていて、その細工が左右に三つずつ、六カ所にわたつて施されているのを確かめると、最早男を動かすことは諦めざるを得なかつた。夕暮れの少年の細めた眼を思い出し、理由はわからぬもの、C あ奴はあ奴でかなりの覚悟でここに臨んでいるのだ、と認めてやりたいような気分がよきかつた。

(注) モルタル—セメントと砂を混ぜ、水で練り合わせたもの。タイルなどの接合や、外壁の塗装などに用いる。

# 異質な他者に触れ 心情思ろ



大学入学共通テストの会場。全国で約53万人が出願した11月15日、福岡市西区の九州大伊都キャンパス

今、「国語」という教科で「文学」をどう扱うか、熱い議論を呼んでいる。

幸田国広著『国語教育は文学をどう扱ってきたのか』は、戦後の国語教育が文学の「鑑賞」から「読解」へ、つまり「おいしいかどうか」から「食べ方」の教育へと変化してきた経緯を丹念にたどっている。結果的に『羅生門』や『走れメロス』など一部の教えやすい教材が定番化し、読解指導の硬直化を招くことになったのであるという。

一時代前の人格主義、教養主義が教室の「文学」観を狭めてしまった経緯、また、人物の心情理解にこだわる「読解」が教材の幅を狭めてしまった弊害など、なるほど傾聴に値する指摘である。だが一方で、後半の論旨には素直にうなずけないもの

があった。感動中心の文学教育では社会に役立つ論理を身につけることはできず、今後は文学と言語運用能力の養成とを区別し、情報化社会に見合った思考力をめざさなければならぬ、というのである。

前半を読むと言語教育と文学教育との高度な融合を理想としているように読めるのだけれども、どうも後半の論旨はそのようには進んでいないようだ。「文学」と「論理」を分離すれば事態が解決するほど単純なものでないことは、昨今の教科書検定をめぐる一連の報道などからも明らかだろう。

## まず「中身」から

これに関連して紅野謙介著『国語教育 混迷する改革』は、こうした一連の動向に警鐘を鳴らしている。教材読解の比重を減らし、言語運用能力、コミュニケーション能力の育成に

う主張に反対する人間はいないだろう。だが一方で、人生でもっとも多感なこの時期、悩みや劣等感を多く抱えた高校生たちに教室で一体何を語らせようというのか、と紅野は問う。

「コミュニケーションのためにまずカバンの中身が必要だ。先人の優れた文章の読解を通して異質な他者への理解を深め、世界の成り立ちについて考えていくということ。一時代前の文学主義に代わる、こうしたあらたな「人文知」の啓発こそ、問題を解くカギが隠されているのではないだろうか。優れた文章の「読解」を通して身につけていく力と、自身の考えを周囲に伝達し、対話していく能力とは本来分かちがたく結びついている。

真に恐ろしいのは両者を切り分け、何しろ情報化社会なのだから後者が大切だ、という論法に流れていく風潮だ。社会のあり方の本質に目を向けず、ただ「説明だけがうまい子」ばかりが大量生産されていく事態など考えがたいことである。情報化社会であるからこそ、異質な他者の心情に思いをめぐらしていく、奥深い知性が求められているのだと思う。

## 「読解」の大切さ

その意味でも、渡部泰明ほか著『国語をめぐる冒険』は実践的な提案として楽しく読めた。「文学」と「情報」の切り分けに悩んでいる現場の教員にぜひ読んで欲しい一冊である。たとえば古典和歌を通して言葉の不思議に目をこらしてみよう、という呼びかけであるとか、「定番教材」である『山月記』にあらたな読みの可能性が秘められているという指摘など、「読むこと」の大切さにあらためて気づかせてくれる。

文学教材が重要なのは、それが現代社会を生き抜く知恵と不可分なものであるからだ。言葉コミュニケーションのツールとしてのみ扱ったとき、「国語」は死んでしまうことだろう。その意味でも幸田がその著の冒頭に紹介している、言語教育と文学教育とは本来一体のものである、という理念にあらためて立ち返りたいものである。

安藤 宏

東京大学文学教授(日本近代代文学)

なぜ国語に文学

◇あんど・ひろし 58年生まれ。著書に『太宰治論』など。